



Title	<Book Review> Anne Sauvagnargues, Deleuze et l'art, PUF, 2005.
Author(s)	小倉, 拓也
Citation	年報人間科学. 2013, 34, p. 247-251
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24966
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈書評〉

Anne Sauvagnargues.***Deleuze et l'art***

PUF, 2005.

小倉 拓也

はじめに

本書は、フランスのドゥルーズ研究者アンヌ・ソヴァニャルグの国家博士号請求論文である。ソヴァニャルグは若くしてパオラ・マラッティとフランソワ・ズーラビクヴィリという著名な研究者と共にドゥルーズに関する共著（Paola Marrati, François Zourabichvili et Anne Sauvagnargues, *La philosophie de Deleuze*, PUF, 2004）を書くなど、現在世界で最も実力のあるドゥルーズ研究者のひとりである。またフランソワ・ドスの報告によれば、フランスにおいてドゥルーズの専門家として大学のアカデミック・ポストを得たはじめての人物でもある¹⁾。近年は初期ドゥルーズの超越論的経験論に関する体系的研究（Anne Sauvagnargues, *Deleuze. L'empirisme transcendantal*, PUF, 2009）も刊行しており、今後ますますその動向が注目される。

本書のタイトルは『ドゥルーズと芸術』であるが、これは決して「ドゥルーズの芸術論」に還元できるものではない。ここでもやはり接続詞の「と [et]」が持つ意味が重要となるだろう。本書でソヴァニャルグが主張するように、芸術作品へのドゥルーズのコミットメントは狭義の美学的研究にとどまらず、その哲学の全体にとって大きな意味を持っている。ドゥルーズは、自身の完成した哲学を芸術作品の分析に適用しているのではなく、芸術をとおして自身の哲学を生産しているのである。プルーストやアルトーといった作家への取り組みなしに「ドゥルーズ哲学」などありえなかったであろうことは想像に難くない。『ドゥルーズと芸術』というタイトルが意味しているのは、単に芸術を哲学に還元することではなく、それらの差異を維持した交流すなわち「離接的総合」なのである。

本書は実に10もの章から構成されており、それぞれのテーマも多岐にわたる。各章の構成は次のとおりである。第1章「芸術の地図作成」、第2章「批評と臨床」、第3章「力のアフェクト」、第4章「器官なき身体」、第5章「解釈批判と機械」、第6章「マイナー芸術」、第7章「リズムと線」、第8章「感覚の暴力」、第9章「芸術と内在」、第10章「結論」。このうち第1章は事実上の序章に相当し、そこでは大胆な方法論と仮説の提示が行われている。結論部分を構成する第10章を除く残りの8つの章はその仮説を証明するための各論となっており、いずれも密度が高く、ドゥルーズのテキスト読解として一流のものである。以下で紙幅の許すかぎりその内容を見ていこう。

地図作成——徴候・記号・イメージ

本書の最大の特徴は、第1章で提示されるその方法論にある。本書は、「芸術論」という観点からドゥルーズ哲学を有機的に解説するのではなく、著作の出版順に機械的に「時代区分 [periodisation]」を行い、そこからひとつの地図を浮かび上がらせるのである。それゆえソヴァニャルグは本書を「調査目録 [inventaire]」と規定する。年代区分による調査目録の意義は、「静的なクリシェに捕われることなく、思考の生成を感覚可能にしようとするシステムの動的な一覧表を素描すること」、すなわち「地図作成」にある。

そこでソヴァニャルグは以下のような時代区分を行う。1. 初期の作品群から『差異と反復』まで、2. 『アンチ・オイディプス』から『千のプラトー』まで、3. 晩年のイメージ論。ソヴァニャルグによると、第1の時期は文学への嗜好によって導かれ、第2の時期は言語活動の意味作用には還元不可能な広義の「記号 [signe]」を考察するための「記号論 [semiotique]」を練り上げ、第3の時期は第2の時期の試みをさらに徹底させて、言語とは対極にある「イメージ」の記号論に取り組んでいるという。このように、ドゥルーズと芸術との関係を素描する地図とは、ドゥルーズ独自の「記号論」の展開の地図にほかならない。第1期を特徴づける文学への取り組みも、当時ドゥルーズが傾倒したかに見える構造主義的ないしラカンの言語論の観点からではなく、記号論の萌芽的試みとしての「徴候学 [symptomatologie]」として捉えられる。

*

第2章でソヴァニャルグはまず、精神病理——ブルーストにおける同性愛、マゾッホにおける倒錯、アルトーにおける分裂症——を扱う第1期の文学論を、正常と病理をめぐるカンギレムとニーチェの議論を介して、意味作用や病因をめぐる解釈のパラダイムからではなく、徴候学の観点から理解する。そしてそこに、『スピノザと表現の問題』（1968年）で論じられている物質的触発というスピノザの記号観を読み込むことで、徴候学としての初期文学論を、中期および後期の記号論へとつないでいく。

ドゥルーズにおいて触発とは、ある対象に何らかの影響を及ぼして以前には存在しなかった新しい状態を生み出すことであり、それは「生成」の謂いでもある。しかしそれだけでなく、*affection* という概念は、16世紀の病理学において、*病理的プロセスをその原因ではなく、その徴候の現実の現れにおいて記述する際に用いられるものであった*²⁾。ここでは、徴候の病因論的な原因は、現実に観察される徴候の配置のなかに分散され、還元される。このような意味からしても、触発の観点から記号を理解することは、諸力の関係のプロセスを、それが持つ意味作用や病因の観点からではなく、徴候とそのアレンジメントの観点から探究することなのである。

ソヴァニャルグは、物質的触発を扱うものとして徴候学を提示することで、ドゥルーズにおける記号の問題系が、第1期の文学論から一貫する主題であるということ、テキストの詳細な読解から証明することに成功している。

*

第3章では、ドゥルーズの文学論のスピノザ的読解がさらに押し進められる。そこで記号は、徴候学をめぐる議論の延長線上で、「力と触発」という観点から、「関係の様態」あるいは「諸力の複合体」と規定される。秀逸なのは、このように記号を定義することで、後期の絵画論における形態概念や、映画論におけるイメージ概念を、記号の問題として扱うことが可能となる点である。たとえばドゥルーズは、『シネマ1』（1983年）において、ベルクソンを注解しながら豊富なイメージの類型学に着手しているが、ソヴァニャルグによれば、物質の作用 - 反作用からなる無限の総体としての運動イメージは、触発し合う諸力の複合体としての記号が織りなす「機械状アレンジメント」であり、そのさなかで作用 - 反作用の間隙として出現する主体は、外の力の折り込みとしての内を持つ諸力の結節点であり、まさに「襞」なのである。このように、イメージとしての世界の運動、そしてイメージとしての主体化のプロセスは、諸力の関係のプロセスであり、まさに記号のプロセスにほかならないのだ。

記号と機械——ガタリとの出会いと新たな記号論

以上見てきたとおり、本書の前半部分では、力と触発という観点から記号概念が捉えられ、その結果、第1期の文学論から第3期のイメージ論まで一本の線が通された。とはいえもちろん、ドゥルーズにおける記号の問題系は、そのキャリアをとおしてずっと同質的なものであったわけではない。本書の中盤以降、ガタリとの出会いがドゥルーズの記号論にとって持つ意義が考察され、記号概念が機械概念との関わりから論究されていく。

*

第5章ではまず、『意味の論理学』（1969年）を主に論じた第4章に引き続き、ドゥルーズにとって精神分析が果たした役割について考察が行われる。それによると、ドゥルーズにとって精神分析は、意識の主体には還元不可能な非人称的で前個体的な諸力の関係の様態を論じるための重要な理論装置であった。しかしガタリとの出会いが、無意識や記号に政治的および実践的位相をもたらすことで、精神分析はラディカルな批判の対象となる。

ソヴァニャルグはこの展開のなかでも、とりわけ、ガタリが政治闘争の文脈で組織や制度が持つ階層性や集権性を批判するために以前から用いていた「横断性 [transversalité]」の概念を、それが後の「リゾーム」や「逃走線」の理論的源泉をなしているという点で、重要視する。そして、次のようなきわめて鋭い指摘を行う。すなわち、ガタリから借用した横断性概念をドゥルーズが独自の仕方でも用いるのも、それをリゾームや逃走線へと展開していくのも、いずれも最初は文学論において行われている、という指摘である（前者は1970年の『ブルーストとシーニュ』第2版において、後者は1975年の『カフカ』において）。すなわち、中期以降の重要な理論装置はそもそも、前期文学論の延長線上に、ガタリを介して、徴候学の徹底化とし

て生みだされているのである。

こうして、第1期の徴候学というドゥルーズにおける記号論的萌芽がガタリを介して『千のプラトー』での記号論へと展開されていく様が、テキストの詳細な読解から鮮やかに証明され、ドゥルーズにおける芸術の重要性が再度確認されるのである。評者が知るかぎり、以上のことを示すことができた研究はほかに存在しない。

*

ソヴァニャルグは次に、ガタリの「機械」概念を論究していく。その際ガタリの機械概念に対するラカンの寄与が強調される。ラカンは、主体が所与ではなくシニフィアン連鎖の効果として生産されるものであると考えたが、ガタリもこれを踏襲しているという。しかしガタリは、ラカンのシニフィアンのコード化に代えてマルコフ的コードをモデルにしつつ、絶えざる切断によってコードそのものが生産されていくと考える。このようなコード化と切断によって特徴づけられるのが「機械」であり、それはシニフィアンの象徴的な次元だけでなく、実在的な社会的生産に関与し、それゆえ唯物論的で異質なプロセスを構成する。

ソヴァニャルグは第6章で『千のプラトー』における言語学批判とマイナー文学（混成の言語 [jargon]）の擁護について検討したあと、第7章で機械的コード化と記号論との関係について細かな分析を行っている。そこで、シニフィアンのコード化から区別される機械的コード化の特権的モデルとなるのが、マルコフ連鎖である。ドゥルーズとガタリは『アンチ・オイディプス』で、「無意識のコードの豊かな領野を発見したのはラカンの功績である」と述べているが、ソヴァニャルグはそれに対して、マルコフ連鎖を用いることの多産性を示したのはレイモン・リュイエの功績である、と指摘する。リュイエは、ロシアの数学者マルコフの仕事を独自に援用し、生命や文化や歴史など多くの現象のコード化の様態を、諸要素の自動的反復によって機能する統計的異質混成過程 [jargon statistique] と捉える。シニフィアン連鎖はこのマルコフ連鎖の一部でしかない。ラカンの言う象徴界が「シニフィアンの可能な用法の束」としての大文字の〈他者〉に支えられているのに対して、マルコフ連鎖はそのような可能な用法の総体平面を前提とせず、その都度の局所的な要求という部分的依存性だけにしがう半偶然的な連鎖である。

ドゥルーズとガタリは、このようなマルコフ連鎖をモデルに機械的コード化を定式化することによって、意味作用とは無関係な記号のプロセスを扱う独自の記号論を打ち立てるのである。

*

ソヴァニャルグはこのような記号のプロセスを「開かれた形態化」というリュイエの言い回しで形容し、第8章と第9章で、このモチーフの延長線上にドゥルーズ晩年の形態論とイメージ論を論じていく。ドゥルーズがリオタールやマルディネを援用しながら論じた形態概念は、不変のエイドスのなそれでも、世界

の具象的表象でもなく、内へと形態化する力と外へと脱形態化する力が織りなす動的で自己生成的な形態であり、それはまさにリュイエ的なコード化の概念と同じ問題系を形成しているのである。

紙幅の関係上晩年のイメージ論をめぐるソヴァニャルグの考察についてこれ以上詳しく言及することはできないが、以上に述べてきたとおり、ソヴァニャルグは本書で、ドゥルーズによる芸術への取り組みを「力と触発」という観点から「記号論」の展開として捉えつつ、ドゥルーズの思考における諸概念の登場と退場を辿りながら、文学論からイメージ論までを貫く一枚の動的な地図を描くことに成功している。

おわりに——何を調査目録として認めるか

最後に一点だけ本書に疑問を呈しておこう。ドゥルーズ晩年のイメージ論は現象学との奇妙な対決をめぐって展開されているという側面があるのだが、ドゥルーズの記号論に着目する本書は、そのような側面を顧みていない。たとえば、メルロ＝ポンティのセザンヌ論への言及と彼の「肉」概念への批判は、『感覚の論理』と『哲学とは何か』の重要な論点なのだが、本書ではメルロ＝ポンティの名前がいか所も挙げられていない。後期ドゥルーズと芸術の現象学の関係に注目している評者としては、このことは少しもの足りなく感じられた。

とはいえ、一冊の書物にそこまで要求するのは凶々しいだろう。本書は十二分に「調査目録」としての役目を果たしている。調査目録は決して事実を調べて並べて示すだけではありえない。ドゥルーズが芸術を「感覚不可能な力を感覚可能にすること」と言っているように、ソヴァニャルグは本書でまちがいがなく、ドゥルーズ哲学における感覚不可能なものをわれわれに感覚可能にしてくれている。卒然とした時代区分と詳細なテキスト読解にもとづき、誰もが知覚しえなかった一枚の地図を見事に浮かび上がらせた本書は、徹頭徹尾調査目録でありながら、その機能において、そしてドゥルーズ的な意味において、それ自体芸術の名に相応しい創造的な仕事である。真に創造的な仕事とは、すでに出揃った概念や理論を利用（搾取）してお手軽な話をするのではなく、本書のように、テキストへの尊敬と執念を手放さずに強靱な読解を行うことからのみ生まれるはずだ。哲学が概念創造であるなら、哲学研究者は概念の地図作成者にならねばならない。われわれはこの地図を持ってドゥルーズのテキスト群へと入っていくことができる。そして、その都度新たに、われわれの発見物をこの地図に書き加えていかなければならない。地図作成は終わらない。

注

- 1) François Dosse, *Gilles Deleuze et Félix Guattari. biographie croisée*, La découverte, 2007, p. 601.
- 2) 丹生谷貴志「『経験論と主体性』を巡るノート」『季刊 哲学』（第8号 vol. III-3）、哲学書房、1989年、198頁。